



図4

過去3万年間における十勝沖・下北沖海底コアの有孔虫化石の炭素同位体比と汎世界的な海水準変動の比較.

上段: 浮遊性有孔虫の炭素同位体比 (PC6コア: 十勝沖コア; PC4コア: 下北沖コア).

中段: 底生有孔虫の炭素同位体比.

下段: 世界各地のサンゴ化石や海底コアの解析により復元された海水準変動.

最終氷期最寒期における海水準は現在よりも120m前後低下していたと推定されている. 有孔虫の炭素同位体比異常が産出する層準は海水準が最も低下していた時期(最終氷期最寒期)からゆるやかに上昇をはじめめる時期(融氷期)に対応する. 紅海 (Siddall et al., 2003), バルバドス海 (Bard et al., 1990), スンダ海 (Hanebuth et al., 2000), タヒチ (Bard et al., 1996), パプアニューギニア (Edwards et al., 1993) のデータを使用.